

デーリー東北

2026年(令和8年)8月26日(水曜日) (17)

八戸市中心街で基本構想策定へ／三沢市視覚障害者歩行支援

バリアフリー 取り組み続々

青森県南地方の自治体がバリアフリー化の実現に向け、新たな取り組みを進めている。八戸市はJR本八戸駅から中心街に至る「街の玄関口」エリアを対象に基本構想の策定に着手。三沢市でも大阪・関西万博で紹介された視覚障害者の歩行支援技術を実験的に導入した。各自治体の担当者はハード面の物理的な障壁を取り除くだけでなく、さまざまな心身の特性や考え方を持つ人々が相互に理解し支え合う「心のバリアフリー」や共生社会の促進に努めていく考えだ。(上條哲洋)



JR本八戸駅から中心街に至るエリアを対象に、バリアフリー化の議論を進めている八戸市の推進協議会＝19日、同市



三沢市役所の玄関に設置されているナビレンスの2次元コード。スマートフォンアプリで読み込むと挿入された情報が音声で流れる。10日

県南自治体、共生社会促進

きっかけは地域からJR本八戸駅へのエレベーター設置を求める要望が多く上がっていたことだった。同駅は1階に改札、2階に八戸線のホームがあり、行き来するには階段を使うしかない。階段脇に定員1人の昇降機はあるが、高齢者や車いす利用者は単独で使用するのが難しいのが現状。キャリーバッグなど大きな荷物がある人も階段の上り下りに一苦労しているようだ。

推進協議会では、同駅だけでなく、駅から中心街に至るエリアを一体的にバリアフリー化することを目指す。バリアフリーやユニバーサルデザインが専門で、推進協議会に学識経験者として参加している八戸工業大学の安部信行教授は「コンパクトで移動しやすい街を実現できれば、地方のモデルケースになりうる」と意義を強調。心のバリアフリーも重視し、市民意識を考慮した議論の深化に期待を寄せる。

一方、三沢市は本年度から、大阪・関西万博で紹介された視覚障害者の歩行支援技術「ナビレンス」の実証実験を進めている。2次元コードをスマートフォンアプリで読み取ると、挿入された情報が音声で流れる仕組み。広範囲、長距離でも素早く読み取れるのが特徴だ。

市役所と市総合社会福祉センターの計18カ所にカラフルな2次元コードを貼り、玄関やトイレ、エレベーターなどの場所を案内している。米軍基地があり国際色が豊かな同市では、ナビレンスが英語の案内に使えることも大きな利点だ。

1年間をめどに結果を検

証する予定で、同課共生社会推進グループの横田和永グループリーダーは「施設の利便性向上に加え、市民が(2次元コードを)目にすることで共生社会を目指すことへのメッセージにもなれば」と語った。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。